

# ライになった転生者が行くスーパーロボット大戦

流星ハルト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コードギアスが15周年迎えるので衝動で作った小説です。

コードギアス単体で扱う自信が無いのでスーパーロボット大戦の世界という扱いでやることにしました。

主人公は「ライ」として生きていますが本来のライとはかけ離れた性格をしているので、ご注意ください。

## 目次

### 第2次スーパーロボット大戦Z 破界篇

1話	ライに転生したよ！	1
2話	ファーストバトル	4
3話	黒の騎士団	16
4話	集結する力	23
5話	赤と青	28
6話	黒の騎士団合流	36

## 第2次スーパーロボット大戦Z 破界篇

### 1話 ライに転生したよ！

突然ですが僕はとある流行病で死んでしまった者です。

生前はアニメや漫画なんかを趣味にしてみました。

特に好きだったのは「コードギアス反逆のルルーシュ」というロボットアニメだった。

それが病気で死んでしまってもうコードギアスに触れることが出来ないと思っていたら……。

次に目を覚ましたらなんとコードギアス反逆のルルーシュLOS TOLORSの主人公「ライ」になっていた!?

今、僕はヒロインのC・Cが着ていた拘束服(男性用)を着て何処かの路地を歩いている。

頭がズキズキするし、足もフラフラする……。

本物のライはこんな状態でアッシュフォード学園に来たのか……。あつ……意識がもう……。

そのまま僕はそのまま意識が遠のいてそのまま倒れてしまった。

次に僕が目を覚ました時、どこかの部屋のベットで横になっていた。

ベットの横には金髪の女の子が立っていた。

「あ、目が覚めた? みんなーこの子起きたわよー!」

女の子の掛け声で、数人の少年少女が駆け寄ってきた。

わかる…わかるぞ! 皆、コードギアスの登場人物だ!

今、声をかけたのはアッシュフォード学園の生徒会長のミレイ・アッシュフォードだ!

駆け寄ってきたのは主人公のルルーシュ・ランペルージ、枢木スザク、シャーリー・フェネット、リヴァル・カルデモンドだ!

やっぱりここはコードギアスの世界だったんだ!

「あなたのこと調べさせてもらったんだけど、何もわからなくて……。とりあえず、呼びにくいんで名前を教えてくださいませんか?」

ミレイが僕に名前を尋ねたので、僕はもちろん「ライ」と答えた。「で？君は一体、何者なんだ？」

アツシユフォード学園の生徒会のみんなが自己紹介を終えるとルーシユが尋問めいた質問をしてきた。

ここでも僕は「ライ」になり切つて、名前以外の全てがわからないと答えた。

そう答えるとミレイはゲームと同じように記憶が戻るまで学園にいればいいと言つてくれた。

実際目にするとなんて器と胸がでかい女の子なんだ。あ、後半は聞かなかつた事にしといて。

「そうと決まれば他の皆にも紹介しなつくちやね」

ミレイがそう言うその後ろからニーナ・アイシユタインと紅月カレン：じやなくてカレン・シユタツトフェルトが現れた。

ニーナにはかなり怯えられていたがカレンは目が合うと「よろしく」と答えてくれた。

実際会うとマジで可愛いなあ…。推しだよ！推しキャラが目の前にいるよー！！

そして、ルーシユの実妹のナナリーを紹介されて終わったと思つていたら……。

「あつ、ミレイ会長。その人、起きたんですね」

「良かったく皆、心配してたんだよ」

「ご無事で何よりです」

……は？あれ？

僕は部屋に新たにやってきた3人の男女を見て頭がフリーズした。何故ならそこに入ってきたのは新機動戦記ガンダムWのヒロイン、リリーナ・ドーリアン。残りの少年と少女は機動戦士ガンダムOOの沙慈・クロスロードとルイス・ハレヴィだったからだ！

ちよ、ちよつと待つてくれ！ここはコードギアスの世界のはずだろ!?

な、なんでガンダムシリーズの登場人物が……!?

頭の中の思考が完全にパニック状態になつてしまったが直ぐに1

つの答えに辿り着いた。

ここにいるメンツで完全に思い出したこと…それは！

第2次スーパーロボット大戦Zだ……。

そう、この世界はコードギアスの世界じゃなかった。

正確にはスーパーロボット大戦Zの世界だったんだ!!

## 2話 ファーストバトル

ミレイ会長の計らいで僕は原作のライと同じようにアツシユフォード学園に仮入学として、生徒会にも入れてもらった。

これまでのことをざっくり話すでしょう。

アツシユフォード学園に来てから結構色々あったが、やっぱり一番印象に残ったのは外に出歩いていたら時にコードギアスのヒロイン、C・C・に遭遇した時にギアスのことを色々教えられたことだろう。

やっぱり僕には原作のライと同じように「絶対尊主のギアス」が備わっているようだ。普通、アニメキャラになりたい転生者ならこういうた力をバンバン使って自分の思い通りにするんだろうけど、コードギアスのアニメをちゃんと見ているとあのシヤレにならない暴走だけは避けたいと思ってる。本当に怖いよこの力は……。

一応、C・C・本人にもその事は釘を刺された。うん！カレンと同じく推しキャラである彼女の言うことは聞いておこう、うん！

だが、対価として直ぐにピザを要求してくる。ミレイさんにもらってるお小遣いだってそんなに多くないんだぞもう！

他に嬉しかったことはゲームの通りカレンが僕のお世話係に就任したことだな。推しキャラについてももらえるなんてこれだからライはやめられない！まあ、自分でなった訳じゃないんだけどさ。

今、僕は生徒会室に備え付けられたタブレットを使ってこの世界の情勢を調べている。

既にこの世界ではソレスタルビーイングが活動を始め、コロニーのガンダムやダンクーガノヴァもチラホラと出てきているようだ。

更にはどこからともなく現れる次元獣などなど。

しかし、このエリアー1で1番注目されている話題はやはり黒の騎士団だろう。

さて、自分はどうするべきか……。黒の騎士団に入ってブリタニアと戦うべきか、逆にブリタニア軍に入って黒の騎士団と戦うべきか……。

だが、ここは純粋なコードギアスの世界ではない。スーパーロボツ

ト大戦乙の世界なのだ。1個でも自分の進む道を間違えたら何が起  
こるかわからないならな……。

「あつ。ライ生徒会室にいたんだ」

「沙慈か」

僕がタブレットを見ながら頭を悩ませていると、沙慈・クロスロ  
ドが声をかけてきた。

「あれから記憶の方はどうだい？」

「うん。色々、こうやってニュース記事とか読んでりしてるんだけど  
…どれもピンとこなくてなね」

「そうか。僕もなにか手伝えるといいんだけど…」

「ありがとう沙慈」

沙慈は本当に優しいなあ。だからルイスみたいな可愛い彼女がで  
きるんかなあ。

「あつ。この記事、姉さんが書いた記事だ。ほら、このソレスタルビー  
イングについての記事」

「本当だ。著者、絹江・クロスロードって書いてる」

沙慈のお姉さんは確か、ジャーナリストだったな。

そして、僕はお姉さんが辿る運命を知っている。このまま死なせる  
くらいなら沙慈に紹介してもらってギアスを使ってこのままソレス  
タルビーイングに関わらないようにさせるべきだろうか……。

「ねえ、お姉さんは今どこで取材してるの？」

「それが、今回は守秘義務とかで教えてもらえなかったんだ。ソレス  
タルビーイングについてって言うのは間違いないはずなんだけど」

……ダメか。結局の所、自分なんてこの程度なのかもしれないな  
……。

残酷な言い方だがやはり今1番に考えるべきは自分の身の振り方  
だろうと改めて認識した。

「そういうえば最近ではカレンと一緒に街を出歩いてるんだってね？何か  
記憶を戻すヒントとか見つかった？」

「まだ何も無いよ。それから今日もカレンと出かける予定なんだ」

「傍から見たら完全にデートだよねそれ」



デートなんだろうか？デートだったらいいなあ…。

いやいや、真剣に考えなさいよ。カレンは記憶を失った（実際には失ってない）僕の為に世話係を引き受けてくれていているんだから、感謝しなくてはならない。

「じゃあ、そろそろ約束の時間だから僕は行くよ」

「うん。行ってらっしゃい」

沙慈に見送られながら僕は生徒会室を後にしてカレンとの待ち合わせ場所へ急いだ。

「ごめんカレン。待たせたかな？」

「ううん。私も今来たところ」

軽い挨拶を交わした後、僕達は目的の場所へと足を運んだ。

そこはエリアー1の影の部分とも言えるシンジユクゲットーだ。

「どう？今日もここへ来たけど、なにか思い出した？」

「ん……」

僕はゲットーの辺りを見渡す。周りはほぼ瓦礫の廃墟ばかりだ。

以前、ここを訪れた時にカレンは言っていた。

華やかなトウキョウと違う。これがブリタニアに支配されるといふこと。力でねじ伏せ、日本という名前を奪い、自治も許さず戦後の復興もしない。

トウキョウ租界はそれを見せつける城のように作られたと……。

あの時のカレンの怒りと悲しみに満ちた表情と言葉は今でも忘れられない。

僕は『ライ』として初めてこの場所を目にした時、とにかく酷いと感じられなかった。そして、自分の目が、風を感じる肌が、五感の全てがそれを現実だと言ってるように感情の波が溢れてきた。

「……やっぱり…酷いな……」

「でしよう。これがブリタニアのやり方……」

カレンは本当はシユタツトフェルトではなく紅月カレンなのだ。

今のこの現状を憂いている。だから戦っていることを僕は知っている。できるなら力になってあげたい。だが、僕は……。

「また考え事？」

「ん？ああ、ごめん。せっかく連れてきてくれたのに…」

「あなたも今のこの現状が間違ってると思ってくれてる？」

「うん…」

その答えに嘘偽りはないつもりだが、大半はいつも自分のことばかり考えてる。僕はその事に罪悪感を抱え始めていた。

「もしかしたら貴方は日本に住んでたんじゃないかしら？だからこの惨状を見て色々考えるんじゃないかな？」

「…そうなのかな？」

それは当たらずとも遠からずというやつかもしれない。なぜなら僕は元々、平和な現実の日本に住んでいた日本人だったのだから。

カレンは可能性の話をした僕の顔を見て嬉しそうに笑っていた。

「なんだが嬉しそうだね」

「そ、そう？」

「僕が日本人だと嬉しい？」

「!?別にそんなことは…それはほら貴方が何か思い出しそうだったから。私だつてその為にここまで付き合ってきたようなものでしょ？」

「そうか…。うん、ありがとうカレン。ちよつと前向きになれそうだ」

「どういたしました。さあ、他の場所も回ってみましょう」

僕たちが再び歩き出したその時…！

ズドーーーーーン!!!

突如、辺りから爆発音が響き渡った！

「きゃ!?」

「カレン!!」

爆発でよろけたカレンを僕が支える。

そして、断続的に続く爆発の中で拡声器のスピーカー越しに声が聞こえてきた。

「我々は黒の騎士団である！これはブリタニアの支配に対する抵抗の炎だ！我々は拳を振り上げる！この拳がブリタニアの血で染まり、真っ赤な日の丸怒鳴るその日まで！立ち上がれ日本人よ！犠牲を恐れるな！黒の騎士団と共に支配者を討て！ブリタニア人を殺せ！」

爆煙の中から大きな影が出てくる。コードギアスの機動兵器、ナイトメアフレームだ。現れたの反ブリタニアの抵抗組織によく使用されている『無頼』という機体だ。黒の騎士団を名乗る連中はゲッターをパトロールしていたブリタニア軍を襲っていたようだ。

だが、奴らは一般の住民を巻き込むような攻撃をして瓦礫の山をさらに多くしている。進行方向にいる住民もお構い無しに跳ね飛ばし、そして爆風で吹き飛ばしているのが見える。

中には日本人も混じっているだろうによくもまあぬけぬけと立ち上がれ日本人などと言えるもんだ……!!

「何を言ってるの……! あんなの、黒の騎士団じゃない! 黒の騎士団は弱い者の味方だ! ブリタニア人でも日本人でも、無差別に巻き込んだりしない! 絶対にしない!」

「……そうだね。ニュースで見たような黒の騎士団のやり方と矛盾してる」

「そうよ! 大方、黒の騎士団の活躍と名声に便乗した弱小組織でしようね。自分達じゃろくな成果も挙げられなかったような連中よ。単なるテロリストだわ!」

「詳しいね」

「そ、そうかしら? ライも言ったじゃないニュースで見たって。それに学園でも結構噂になってるし……」

感情的になっていたことを誤魔化すように言うカレン。

しかし、のんびり話をしている暇はない。テロリストを追ってブリタニアのナイトメアも現れた。

紫色の軍用機『サザーランド』だ。

「ここは危ない。早く避難しよう」

「そうね。急ぎましょう」

ブリタニアも周囲に構わずテロリストに向かって射撃を始めた。同様にテロリストも撃ち返す。

くそっ……! どっちもどっちかよ!?

「きゃあ!?!」

「ちっ!?!」

僕たちの周りでナイトメアの銃声が響く。

コンクリートとアスファルトの破片、そして、血しぶき。

しまいにはゲットーの住民たちの断末魔の叫び。

「そんなっ！なんで!?!ひどい!」

「早く逃げるんだ！僕たちも巻き込まれる!」

僕たちも走り続けるが遅かった。苦し紛れにブリタニアの包囲網から抜け出してきたテロリストの無頼が僕らの方へ突っ込んできた。

ブリタニアのサザーランドがその無頼を追撃して、無頼の頭部に当たてる。

無頼はバランスを崩して仰向けに倒れ込んでくる。

僕は咄嗟にカレンを両腕の間に抱きかかえて無頼に背を向けた。

「くっ……!?!」

「だ、大丈夫!?!」

「あ、ああ……」

僕はカレンを離すと後ろを振り向く。すぐ目の前に無頼の胴体がひっくり返っていた。倒れた衝撃か、操縦席のハッチが開いている。

操縦者と思われる男が慌てふためいて操縦席から転げ出て、そのまま一目散に逃げ去っていた。

「ねえ!?!平気? なんともない!?!」

「……大丈夫。かすり傷もない」

「もう、無茶して……」

「君が無事でよかった」

「……」

カレンは一瞬黙り込んだが、すぐさま倒れた無頼に駆け寄って操縦席をのぞき込む。

「どうやらまだ充分に動きそうだ。」

「……キーが差しっぱなし」

「動かせるの?」

「え? あ、えっと、出来ない、わよ。出来るはずないじゃないナイトメアの操縦なんて」

歯切れ悪くいうカレン。大嘘なのは僕はよくよく知っている。

転生する前に見ていたコードギアスのアニメで彼女が紅蓮に乗って大暴れしているのをこの世界の誰よりも知っているからだ。

「……」

僕は操縦席を見渡す。解る。左右の操縦桿。フットペダル。出力ゲージに武装、残弾数。パーツと計器類の意味が全て理解出来る。

これが『ライ』に刷り込まれたナイトメアフレームの操縦技術……。それが、僕にも解る。

「行くぞ。こいつを動かす」

僕は躊躇なく無頼の操縦席に滑り込んでカレンを中に引き入れる。「動かすって…あ!」

狭い座席なので、自然とカレンが僕に体を預ける姿勢となる。

こういうの喜ぶシチュエーションなんだろうがそうも言ってもらえない。

「ハッチが閉まらないから目視操縦で行く。しっかり掴まってる!」

「う、うん……」

カレンが僕の首に両腕を回して力を込める。

まずは原作のライがやったとおりにスラッシュハーケン(ワイヤー式のアンカー)を手近の壁面に打ち込み、一気にワイヤーを巻き上げて姿勢を立て直す。

よし、ここまで手順通り……!

目の前にこの無頼を追っていたサザーランドが迫ってきた。

そのままサザーランドはランスを構えて突っ込んできた。

(仕留め損なって狩りに来たんだろうが……動きがわかりやすいんだよ……!!)

バキン!!

僕は無頼に装備されたスタントンフアでランスを跳ね飛ばす!

サザーランドは動揺しつつもライフルを構えようとするが、僕はその隙を逃さず更に右腕のスタントンフアを頭部にぶち込む!

ズガン!!

頭部を破壊された衝撃でサザーランドがゆっくり倒れる。

「よし……まずは一機……!」

「あなた、一体……」

「今のうちにここを抜ける。フォローが入ると厄介だ」

「ええ…そうね…」

だが、すぐさまブリタニア軍は包囲網を狭めてきて逃げ道を塞いでくる。サザーランドが更に二機現れて退路を封鎖してくる。

「ちっ……!?!この機体じゃヤツらを相手するのはキツイぞ……!」

「ダメなの!?!」

逃げるのを躊躇していたその時……!

ズドoooooooooo!!

いきなり、目の前のサザーランド二機が爆発した。爆炎の背後には無頼が数機。

「テロリストの援軍!?!」

だが、新たに現れた軍勢は周囲のブリタニア軍だけでなく、テロリストの無頼もあっさり破壊して廃墟の中を駆け抜けていく。

軍とテロリストを排除しながら逃げ遅れていた住民たちを逃走路へ誘導して始める。

「黒の騎士団だわ!」

「え?」

「彼らこそ、本物の黒の騎士団よ。間違いないわ!」

カレンの言葉が終わらぬ内に、黒の騎士団と思われる無頼が数機、僕の無頼を囲んできた。テロリストの無頼に乗り込んでいるんだから当然と言えば当然だろう。

「……」

カレンが身をよじって、開きっぱなしのハッチから体を乗り出す。すると周囲の無頼は銃口を下げて、こちらに道を開けるように体勢を変える。

「私たちがテロリストじゃないって分かってくれたみたいね……」

「……そうか」

勿論、僕はそれが嘘だともわかってる。彼女も黒の騎士団の一員だからだ。

とにかく、僕は出力全開で一気に戦場を後にした。

「……………」  
「……………」

僕たちは無頼を乗り捨ててゲットーから離れた場所へ逃げ延びた。……あれが戦場……。でも、何故か不思議と落ち着いている。死んで転生する前は戦争も知らない一般人だったのに……。これは『ライ』のおかげなんだろうか？

「……今日はもう、戻りましょう」

「……そうだね」

租界近くで乗り捨てた無頼を物珍しげに集まる人垣を掻き分けて、僕とカレンは帰路に着いた。勿論、あんなことがあった後なのでカレンは家の前まで送っていった。

僕も学園の寮に帰った頃にはシャワーすら浴びずに眠りこけてしまった。

そして、その翌日……。

「ライ、おはよう」

「……おはよう」

学園に来て早々にカレンに声をかけられた。

「ちよつと後で、お話できるっ？」

「うん。いいよ」

ホームルームが終わって僕とカレンは屋上へと足を運んだ。

カレンは僕の顔をじっと見て話し始める。

「質問があるわ」

まあ、何を言われるかは想像がつく。

「ナイトメアフレームって、車やバイクのように簡単に乗りこなせるものじゃないわよね？軍隊での訓練とか」

「だろうね」

普通の間人がロボットなんて操縦出来はずもないからこの質問は当然だ。だが、僕は記憶喪失の『ライ』を偽って生きているので、こう答える。

「わからない。だけど、操縦方法は知っていた」

「思い出した、ってこと？」

「違うかな。とにかく乗り込んだ時に当たり前のように動かせた。ただ、知っていたとしか言い様がないんだ」

「……そう」

「君はどう思ってる？」

「そうね、あなたが高度な訓練を受けた軍人であった可能性は高いわ」  
「軍人ねえ……」

「それに、無頼をあれほど上手に使いこなしたのよ。無頼は日本の手が入ったナイトメアフレーム。もしかしたら、貴方はどこかの反抗組織にいたのかも」

カレンはそう言うが実際は違う。これは『ライ』に刷り込まれた記憶なのだ。これをいう訳には行かないので僕はカレンにこう答える。

「日本人であり、反ブリタニア組織。だとしたら、この学園にいるには、物騒すぎる人間だな僕は……」

「もしかしたらよ。あくまで仮説に過ぎないわ」

「……それにしても君は、ナイトメアにも詳しいんだね」

「女の子の趣味としては、ちよつと変わってるのは自覚してるわ。だから……みんなには言わないでよ」

「勿論言わないよ」

そう取り繕うカレン。実際の彼女は黒の騎士団の団員なのだからこれくらいは知っていて当然なんだろう。

とにかく僕たちは話を切り上げて授業が始まる前に教室へ戻る。

その日の昼休み。

僕とカレンは昼食をとるために食堂へ来た。

「混んでるわね……いつもより」

「そうだね……」

ざわめく食堂の周りの生徒たちの視線と言葉が僕とカレンに向けられている。

「よお！お二人さーん」

「やあ」



リヴァルとルルーシュが僕らに声をかけてきた。

「ちよつと…お二人さんとか…。そう言うのはやめてよ」

「何を仰るお二人さん。既にちゃーんと、しつかり耳に入ってますよォー！」

「なんの事かしら？」

「ほら、こないだのシンジクゲッターでのテロ騒ぎ。黒の騎士団も現れたってアレだよ」

「あ……」

リヴァルが芝居を始めるように言う。

「記憶を失った男ライ。そして、その失われた記憶のために危険なゲッターにまで共に足を運ぶ健気なカレンお嬢様！そこへ現れるイレヴンのテロ組織！鎮圧に出動したブリタニア軍との戦闘に巻き込まれ絶対絶命の二人！男は女を守るために身体を張った！『カレンは俺が守る！』二人は炎の中を駆け抜けたア!!」

「……」

「……」

「……」

しかし、僕とカレンとルルーシュは呆れるようにリヴァルを見た。

「……って、そういう話になってるけど？」

「大袈裟ね……噂話は尾ひれが付くものよ」

「でもさあ、助けたのは事実なんだろう？カレンのような、か弱い女の子が無事に逃げ出せたのがその証拠だし」

か弱い女の子ね……。やつべえ…ちよつと笑っちゃいけないとわかってても笑いそうになる…！

「どうした？」

「いや、何も無いよ……」

ルルーシュに気づかれそうになるがなんとか平静を保つ。

「とにかく、大切なクラスメイトを助けてくれた。その事にはお礼を言わなくちゃな。ありがとう」

「ルルーシュ……」

「学園内、この話で持ち切りなだけ。カレンお嬢様と、その素敵なナイ

ト様ってね！」

「またもう…そんな話で喜んで…」

「年頃の高校生ってこういう話好きだからね。仕方ないよ」

「なんかジジくさいわよライ……」

カレンにジジくさいと言われてしまった……。結構、ショック……

！

この後、リヴァルにどうやって戦場を潜り抜けたのかを問い詰められたが正直に答えるわけにはいかなかったがカレンが助け舟を出してくれてたので事なきを得た。

さて、今回は上手く切り抜けることが出来たみたいだが次はそうはいかないだろう。この世界で戦うのはテロリストやブリタニア軍だけじゃない。もっとより大きな何かと戦うのだから。何度も言うがここはスーパーロボット大戦の世界。何が起きてもおかしくは無いのだから…。

### 3話 黒の騎士団

アッシュフォード学園に仮入学して数週間たった頃、この学園に新たに転校生が迎えられることになった。

「俺、デュオ・マックスウェルっていうんだよろしくな!」

「……ヒイロ・ユイだ」

とんでもないのが来ちゃったよ!?新機動戦記ガンダムWのヒイロとデュオじゃん!?

そーいや、任務か何かでこの学園に潜入してきたんだっけ?

実際にあの二人を目にするとオーラが違うよな気がしてならない

…!

カレンはあの二人が来たことに驚いている。どうやら既に知り合  
いのようなだ……。

悪いとはわかっていたが放課後にカレンとガンダムパイロットの  
2人が行動している所をつけてしまう。

何からしら行動を起こすところを相談しているんだろう。

しかし、そこへなんとリリーナさん乱入!

ヒイロとデュオに話しかけている。

「あなた達の歓迎パーティーを生徒会主催で催しますので、それのご  
招待に参りました。これが招待状です」

「……………」

ヒイロはリリーナさんが渡した招待状をその場でビリッと破いて  
捨てた。

うわあー。見ちゃったよ原作でもやった招待状破り。リアルで見  
るとマジで酷いよね……。

ヒイロは黙って行ってしまった。流石に「……お前を殺す」は言わ  
なかったな。何を期待してたんだ僕は……。

「何よ、あれ!?招待状を破り捨てるなんて、人間のやることじゃないわ  
よ!」

リリーナと行動していたルイスが声をはりあげて言う。

そりやそうだろうね……。

「悪いな。俺もヒイロも苦学生なんで、放課後はバイトで忙しいんだ。じゃあな、パーティーは皆で楽しんでくれよ」

デュオがフォローを入れて立ち去った。リリーナさん達はヒイロとデュオの後を追いかけついでいった。

ふうく。一触即発だった……。

「ライ？そんなところで何してるの？」

「あつ……」

やり取りを夢中になってみていたのでカレンに見つかってしまった。

「あついや。覗き見するつもりはなかったんだけど……」

「さっきのヒイロのあれを見たのね。断るにしても招待状を目の前で破るなんてね……」

「そ、そうだね。あれは……ないよね……」

「あつ……そうだライ。今日、時間……あるかな？」

「え？あるけど……どうしたの？」

「これを……」

カレンに一枚の紙を渡された。

どうやら小さな地図のようだ。

「今日の夕方、必ず来て欲しいの。その時に、全部話すわ」

カレンはそう言って立ち去って行った。

いよいよ、黒の騎士団からお呼びが掛かったようだ。

その日の夕方。僕はカレンの指定された場所へとやって来た。

周りは誰もいない廃墟の瓦礫の山、シンジユクゲッターの近くだ。

その場所で一人の少女が僕を待っていた。

「……来てくれてるって信じてた」

「……カレンだよね？」

「どう？学園での私と比べて。驚いた？」

今のカレンはレジスタンス活動する時の活発的な服装で髪も逆立つような形にセットしてある。学園のお嬢様スタイルとは大違いだ。

「……ううん。その方がらしいって感じがする。学園での君はどこか無理してる感じがあったから」

「むっ…。わかってるわよ。自分でも病弱なお嬢様設定にしたの後悔してたんだから」

「べ、別にお嬢様のカレンが似合わないってわけじゃないよ！ただ、どっちのカレンも魅力的なのは間違いないから！」

「な、何を言ってるのよーもう……！」

カレンは顔を軽く赤くしながらそっぽを向いた。

自分で言うのもなんだが言った自分も照れくさい。

「そ、そんなことより着いてきて」

僕はカレンに廃墟の階段を降りるように言われてついに行く。

ついてきた場所は誰も寄り付かない地下街の跡だった。

「あなたにはお願いがあるの」

「お願い……？」

「私たちと一緒に戦って欲しい」

「戦う……ブリタニアと？」

「そう。今のこの日本の姿。あなただって間違っているとわかってるでしょ？」

「……漠然としてるけど、僕も…そう思う」

「ライ、あなたは、多分日本人だと思う。いえ、きっとそうだわ！」

「結構、日本人離れしてる顔してると思うんだけどな……」

「顔の問題じゃない。本当のあなたはブリタニア人よりも、ずっと私たち日本人に近いって。それに、ゲッターの現状にはあなたも怒りを覚えたはずよ。そうでしょ？」

「ああ。そう思う。でも、ブリタニアは強大だ。それに、勝つことができてる？」

「私たちにはそれができる。それをやり遂げることができるリーダーがいるのよ」

「リーダー…ねえ…」

「その彼に会わせる為にあなたを呼んだの。お願い。日本のために私たちと一緒に戦って」

「……まずはそのリーダーの話を知りたい」

「そうですね。ついてきて。もうすぐ私たちのアジトよ」

カレンに案内されて地下道の広い場所へやってきた。

灯りが見えた先に数人の男女が立っていた。

「着いたわ」

カレンの案内した場所には黒い服を着た人々が周りに立っていた。

その先頭に仮面をつけた男が立っていた。

カレンが仮面の男に駆け寄る。

「例の男を連れてきました」

「ご苦労だった」

「ライ、紹介するわ。彼はゼロ。私たち黒の騎士団のリーダーよ」

「彼が…ゼロ」

カレンに紹介されたゼロが僕の前に歩いてきた。

「会えて光栄だライ。君のことはカレンから聞いている。それで、いささかこちらでも調べさせてもらった。実に有能で、それでいて謎めいている」

謎めいているのはあんたの仮面だというツツコミはしちやいけな  
いんだろうなこれ……。

「あなたには是非、黒の騎士団に加わってもらいたいのよ、ライ」

「……つまり、僕をスカウトしてきたと？」

「そう。私は紅月カレン。カレン・シユタットフェルトは仮の姿で  
こっちが本当の私。ゼロ、私は彼を黒の騎士団の加入を推薦します」

「……いいだろう。承諾しよう。私としても望むところだ。もつと  
も、後は本人の意思次第だがな」

ゼロは僕の方をじっと見ている。だが、僕の心は決まっていた。

「いいよ。やってやるよ黒の騎士団」

「ほう？即答か。理由を聞いてもいいか？」

「僕はカレンを信用してるし、そのカレンはアンタを信用してる。そ  
れに……」

「それに？」

「あんたはいずれデカイことをやってのける気がする。僕はそれが見

てみたい。それを実現するために僕も一緒に戦うよ」

「なるほど。面白い理由だな」

「とにかく、僕も黒の騎士団に加わらせてもらおう」

「ありがとうライ！」

カレンは嬉しそうに言ってくれた。そんなに喜ばれるとやはり照れると言うものだ。

「決まりだな。歓迎しよう。ようこそ！黒の騎士団へ！」

ある意味地獄に片足を突っ込んだ気分だがこの世界を渡り歩くにはこの男、ゼロ。いや、ルルーシユの力が必要になる。

勿論、ゼロの正体がルルーシユだと言うのは気付かないふりを貫き通す。

「じゃあライ、メンバーを紹介するわね」

「あつ…うん」

カレンは僕を黒の騎士団のメンバーに紹介する。

「カレンの推薦だ。心配はないと思うがしつかりな」

先輩らしく肩を推してくれる扇さん。

「てめえ！新顔のクセに無頼を回して貰えるって話じゃねえか！絶対、壊すんじゃないぞ!?!」

やたら噛み付いた言い方をする玉城さん。

まあ、いきなり入ってきた新人が貴重なナイトメアフレームを使っている話になったら古参としたら納得いかんのも当然かな。

カレンは「あのバカは気にしなくていいから」なんて言ってたけど。

「あれ？お前、アッシュフォード学園にいたやつじゃねえか？」

カレンとアジトを歩いているとある人に声をかけられた。

デュオ・マックスウェルその人だ。

「君は…デュオ・マックスウェル」

「そうそう。お前、確かカレンが連れてきたんだって？」

「そうよ。彼がライ。即戦力になるナイトメアのパイロットよ」

「俺も学園に来たばかりだけど噂は聞いてたぜ。ゲットーのテロ騒ぎからカレンを助けたナイト様だったな」

「まだあの噂聞いてたの？全くもう……」

デュオが噂話に笑っているとカレンは呆れるようにため息を吐いた。

「君も黒の騎士団のメンバーなの？」

「いや、俺はあくまで協力者みたいなもんだ。今日は居ないけどヒロのやつもそうだけ」

「そうか。やはり彼も……」

「デュオとヒロはコロニーのガンダムパイロットなの」

「今、ソレスタルビーイングと同じくらい話題になってるあのガンダムの……!」

「まっ。カレン達とつるんでると俺たちの任務もやりやすいつて訳だ。改めてよろしくな」

「ああ。こちらこそよろしく」

デュオと挨拶を済ませたあとはナイトメアフレームや機動兵器を格納する場所へと来た。

「……あれってAT…アーマード・トルーパーだよね？」

「そうよ。次元振動の影響でアストラギウス銀河から流れてきたやつ。でも、あれを使ってるのは黒の騎士団では1人だけ」

「今、あそこでATを整備してる人がパイロット？」

「うん。彼があのスコープドッグってATのパイロットやってる。キリコ!新入りを連れてきたよ!」

カレンがATを整備している人物に声をかける。

キリコ…彼が「装甲騎兵ボトムズ」の主人公、キリコ・キュービー

!

「キリコ・キュービーだ」

「ラ、ライです。よろしく」

す、すごい迫力だ。とてもじゃないけど同じ10代とは思えない。

先のヒロ・ユイともまた違った凄みを感じる。

「とりあえず今、黒の騎士団のメンバーや戦力はこんなものかな？」

「おいおい。カレン俺のことは紹介してくれないのかよ?」

僕とカレンに新たに声をかけてくる男性が現れた。

「クロウ。あんた、いたの?」



「いたの？はないだろ。今は俺だつて協力者だぜ？」

「あんたは借金返済のために色々出て回ってるから」

クロウという事は……第2次スーパーロボット大戦Zの主人公、クロウ・ブルースト！

「クロウ・ブルーストだ。よろしくな。しかし、カレンが男連れてくるなんてな。明日は槍でも降つてきそうだ」

「相変わらず失礼な物言いしてくるよねアンタは。そんなんじゃないやなくて、ライは黒の騎士団の力になってくれる新戦力なのよ」

「過大評価しすぎだよ。僕は少しナイトメアフレームを動かせるだけに過ぎないよ」

「だがよ。黒の騎士団で一番のナイトメアフレーム乗りのカレンが推薦してるんだろ？胸張つてもバチは当たらねえと思うぜ？」

「そう…ですかね？」

「俺だつたら胸を張るな。まあ、もつとも見えただけじゃ借金は返せねえんだけどな」

「借金？」

「クロウは100万Gの借金を返済の足しにするために黒の騎士団で傭兵やってるのよ」

「またなんとも……」

知つてるとはいえ実際、借金返済のために戦う男というのはなんともしまらないものである。

とにかくこれで、黒の騎士団のメンバーや協力者。そして、戦力は把握出来た。

これからは僕もこの黒の騎士団のメンバーとしてやっていくのだ。気を引き締めていこう。

## 4話 集結する力

黒の騎士団のアジトにて、ゼロから召集がかかった。

「クロウの所属しているスコート・ラボに大量の次元獣が現れた。これより我々も救援に向かう」

次元振の影響で現れた災害級のバケモノか。

クロウは確か、愛機のブラスタを整備するためにスコート・ラボに行っているんだったな。

「いよいよ実戦か……」

「大丈夫ライ?」

「大丈夫。相手がバケモノの分、気持ちがお楽だよ」

自分の搭乗機のグラスゴーに乗ろうとしていたカレンに声をかけられ僕は問題ないと答える。

そして、僕は自分の無頼のコクピットに乗り込んだ。

「こちら、ライ。無頼で出撃する!」

僕は操縦ペダルを踏み込み、無頼を発進させる。

一緒に出撃するのはカレンのグラスゴー、ゼロが自分で鹵獲してきたサザーランド、キリコのスコープドッグ、デュオのガンダムデスサイズ、ヒイロのウイングガンダムだ。

僕達は機体をスコート・ラボへ飛ばした。

そこで、僕たちが見たのは白い大きな次元獣にクロウの乗ったブラスタが撃墜される瞬間だった……!

「ク、クロウ……!?!」

「各機は次元獣を迎撃しろ!」

全員が驚愕しているとゼロが指示が飛んできた。

「で、でもクロウが……」

「目の前の敵に集中しろ!次元獣を倒さなければ、ブラスタを回収することも出来ない!」

「ゼロの言う通りだカレン。こんなに次元獣がうじゃうじゃいたら僕たちもタダじゃすまない」

「ゼロ……ライ……。わ、わかった!」

僕とゼロの言葉に納得したカレンはグラスゴーの武器を構える。

「ゼロ。僕たちのナイトメアとキリコのドックの武装じゃ次元獣を倒すのは難しい。だけど……」

「わかっている。ヒイロとデュオのガンダムの武装なら倒すこともできよう。我々は牽制と援護に回るべきだといいたいのだろうか？」

「流石だ。そこまで分析しているとは……」

「愚問だな。装備の現状把握は作戦を立てる上で必須だ」

「それもそうか。編成は？」

「お前とカレン、デュオの3人。私とキリコとヒイロで行く。2人への指示はお前がやれ」

「了解。期待に応えるよカレン、デュオ！今の聞いたね？」

ゼロからの支持を受けて僕はカレンとデュオに通信を繋ぐ。

「わかってるよライ！」

「トドメは任せときな！」

「よし！各機散開!!」

僕とカレンが先行してマシンガンで次元獣を撃つ。

だが、奴らにはこの程度の武装は豆鉄砲も当然だ。しかし……！

「オラオラオラア！死神様のお通りだ!!」

デュオのガンダムデスサイズのビームサイズが次元獣を真つ二つに切り裂いた。

「ナイスフォローだったぜ2人とも！どんどんいこうぜ！」

「このままデュオを援護する！行くよカレン！」

「う、うん……！（私にも……もつと強力なナイトメアフレームがあれば……あれくらい！）」

一方、ゼロのチームは……。

「キリコは私とともに次元獣を牽制しろ！ヒイロ！後はお前がバスターライフルで一掃するんだ！」

「了解した」

「任務了解。ターゲット次元獣……！」

ゼロとキリコが僕たちのようにマシンガンで次元獣を攻撃して隙を作る。

そして、ヒイロのウイングガンダムのバスターライフルが次元獣を数体焼き払う。

皆、凄い動きだ。これなら勝てる……!

しかし……!!

「くっ!ダメだ!あの白い大きなやつに攻撃が通らない!」

「下がってカレン!また突進してくる!」

「奴のD・フォルト(バリア)が強力すぎる…。バスターライフルも今一つだ…」

「冷静に分析してる場合じゃねえぞヒイロ!このままじゃジリ貧だ!」

クロウを撃墜した白いサイのような次元獣ライノダモンの猛攻に僕達は苦戦を強いられた。僕とカレンとヒイロ、デュオで攻撃を仕掛けたがまるで歯がたつていない。

「どうするゼロ……!撤退も視野に入れるか?」

「それではスコート・ラボとクロウを守ることはできない!……だが、このまま戦っても敗北は必須か……」

「いや、待て!このエリアに接近してくる部隊がある!戦艦が2隻だ!」

僕がレーダーで確認するとこの戦域に近づく2隻の戦艦が現れる。

あれは……!エウレカセブンに出てきた「月光号」とソレスタルビーイングの輸送艦の「プロトレマイオス」だ!

月光号とプロトレマイオスから次々と機動兵器が発進される。

KLFのターミナス type B303、ソレスタルビーイングのガンダム4機、ダンクーガノヴァ、ゲッターロボ。

僕が転生する前に見たことがあるロボットがたくさん現れた!

向こうはこちらに危害を加えることなく次元獣に攻撃を仕掛ける。やはり目を見張るのはゲッターロボとダンクーガノヴァであろう。

さすがはスーパーロボット。一撃がダイナミックだ!

「断空剣!断空うううう斬!!」

ダンクーガノヴァの断空剣は次元獣のD・フォルトをもろともせず

切り裂く。

「ゲツタアアアビイイイム！」

ゲッターロボのゲッタービームは次々と次元獣を焼き払っていく。

「す、すごい！」

「呆気にとられている場合ではないぞライ！我々も攻撃に参加するぞ！」

「了解……！」

ゼロに注意を下さされ、僕は攻撃を再開した。

ソレスタルビーイングとスーパードボットの加勢のおかげで次元獣はものの数分で片付いた。

しかし、あの白いライノダモンには逃げられてしまったが、今はよしとしよう。

気がついたら月光号は姿を消していた。どうやらソレスタルビーイングとは偶然かち合っただけにやって来たことが後でわかった。

戦闘後、プトレマイオスの戦術予報士のスメラギ・李・ノリエガからゼロへ会談の要望が通信で入ってくる。

「で、ゼロはその会談に僕も参加するように言ってきた。」

「いちパイロットの僕がそんな席に参加していいの？」

「君にはいずれ重役を任せようと考えているのでな。問題は無い」

「新入りの僕を重役に？唐突だね」

「今回の戦闘で私は確信している。君はただのパイロットでは収まらない器だ」

「……とにかく今は会談に集中するよ」

「ああ。では行くぞ。相手はソレスタルビーイングだ。油断ならない相手になるだろう」

僕とゼロ、そしてカレンは会談場所に指定されたプトレマイオスのミーティングルームへ足を運んだ。

会談の結果、僕達はポートマンと呼ばれる謎の人物によって集められ国連の平和維持理事会への協力を要請されているとの事だった。

協力内容は国連の使節団の護衛だそうだ。

ゼロは見返りとしてポートマンにキョウトという日本の旧財閥連

合との渡りをつけることを条件にしたそうだ。  
さて、ここから本格的にことが動くことになりそうだ……。

## 5話 赤と青

黒の騎士団の僕達は同盟を組んだソレスタルビーイングやスーパーロボット達と一旦、別れて戦力を整えることになった。

ボートマンなる謎の人物のおかげでキョウトの旧財閥連合と協力することに成功した。

おかげでナイトメアフレームから武器まで今まで以上に充実してきた。

ちなみに黒の騎士団の傭兵扱いになっているヒイロ、デュオの2人は先にソレスタルビーイングに合流して今はこちらにはいない。

運ばれてきた物資の確認をしているとカレンが声をかけてきた。

「ライ、見てよこれ！」

カレンの背後には朱色を基調とした右腕が銀色の大型ユニットになっているナイトメアフレームがあった。

「……これが？」

「初の純日本製ナイトメア。それがこの紅蓮式式よ」

コードギアス原作でこの黒の騎士団のエース機体となる紅蓮式式。

ついに生で拝ませてもらおう日が来るとは光栄だ。

「確か、紅蓮式式のスペックは……」

「単位時間あたりの運動量はブリタニア軍の主力機サザーランドの1.6倍に達するそうよ。出力に見合った装甲を備えているから防御力も高いわ。それに輻射波動という新兵器もある」

「君が乗るんだろ？」

「ええ。ゼロに任せられたわ……」

カレンはとても高揚した気分僕に話す。

「なんか、こう……可愛いな……」

「ライ。それにカレンもやはりここにいたか」

僕達の背後にゼロが現れる。

いきなり現れるんだからびっくりするなもう……

「ゼロ。物資の確認なら今してるところだ」

「わかっている。君たちに見せたいのはこの紅蓮式式だけではないの

だ」

「と言つと？」

「ついてきたまえ。カレンも来るといい」

「は、はい」

僕とカレンはゼロに連れられて格納庫の奥へ進む。

そこでは先程、紅蓮式式を運んできた整備員が忙しく動いていた。

「ちよ！待った！この青い機体は!？」

「月下よ。素敵でしょ？」

僕に声をかけてきたのはキセル（煙草）をくわえた褐色肌の金髪の女性だ。

「ラクシャータ・チャウラー。紅蓮式式の設計者だ。今後は我々に同行し、ナイトメアを通じてデータのフィードバックを行う」

「まあ、あなた達から見れば、あなた達をモルモットに、新型機の実戦試験をする役目ね」

「は、はあ……」

モルモットね……。本人を前に言うとは大胆すぎる。

「間抜けな反応ね。もつとも、月下に関しては心配は無用よ。この子は言わば紅蓮式式の量産タイプ……。言わゆる兄弟機みたいなものだから。無頼と比べれば反応過敏だし、主力調整もちよーつとピーキーだけど、アンタなら大丈夫でしょ。多分」

多分ねえ……。もうちよい言葉欲しいな……。

「この月下には『戦闘隊長』になる君に乗ってもらう。カレンの紅蓮式式共に、黒の騎士団の双壁としてな」

「ん？ちよつと待て戦闘隊長？僕が？」

「ソレスタルビーイングとの会談の前に言ったはずだ。君にはいずれ重役を担ってもらおうと」

「す、すごいじゃない！ライ！専用機と戦闘隊長を任されるなんて！凄いわよ！」

カレンが自分の事のように喜びながら僕言う。

「戦闘隊長になる先発理由を聞かせてもらってもいいかな？」

「スコート・ラボでの戦いでは的確な判断をくだしてくれた。無頼を



操ってでのあの戦闘力と判断力は大変頼りになる。カレンは私直属の親衛隊になってもらうために君には実戦段階のナイトメアを束ねる部隊長になって欲しい。いざと言う時は私の命令ではなく独自の判断で行動する事も許そう」

偉い高待遇だ。あの1回の実践でそこまで信用されるとは。

「……そこまで言うなら引き受けるしかないな」

「うむ。よろしく頼むぞライ戦闘隊長」

「頑張りましょうねライ！」

ゼロとカレンの期待をひしひしと感じる。結構、プレッシャー感じるなあ……。

「じゃあ戦闘隊長の就任も決まったことだから早速乗ってくれるう？はいこれ、新型パイロットスーツ。着心地と生存性は保証付きよ。しかもカレンちゃんとお揃いよお」

ラクシャータがニヤニヤしながらパイロットスーツを手渡してくる。

データを取れる事なのか、それともカレンとお揃いの事をからかってニヤついているのかどっちかわからない。

「ラ、ライとお揃い……」

「カレン？」

「う、ううん！な、なんでもない!？」

「そ、そう？」

「ラ、ライのスーツって青色なんだね！」

「カレンのは紅蓮に合わせて赤いの？」

「そ、そうよ」

「なら、赤と青でいい双壁になれそうだね」

「う、うん……」

カレンが少し頬を赤くしながら頷く。や、やめろよ可愛いすぎるからさ……。

数分後、僕は早速、パイロットスーツに着替えて月下に乗る準備をしていたら玉城が声をかけてきた。

「よう！聞いたぜお前！戦闘隊長になったんだってな！新米なのにえ

「らいスピード出世じゃねえか！」

「若輩者ながら頑張らせてもらいます」

「こないだの次元獣との戦い見てたら反対できねえしゼロのお墨付きだろ？もう、文句言わねえよ」

「ありがとうございます」

「それで、今からその新型に乗るんだろ？俺が模擬戦の相手してやることになったからよ！ちゃんと実力見せろよ戦闘隊長殿！」

そう言つて玉城は自分の乗る無頼へ足を運ぶ。アレつて僕が乗つてた無頼だっけ？それなりにカスタマイズしてあるけど玉城に乗りこなせるのかな？

僕は少し気になりながらも月下のコックピットに乗り込んだ。

「……これが僕の月下先行試作型。僕の専用機……！」

僕はラクシャータに渡された起動キーをコンソールに差し込んでエンジンをかける。

操縦レバーをしっかりと手に握り、ゆつくりとフットペダルを踏んで月下を動かす。

「……すごい。無頼なんかより凄くしつくりくる」

ちよつと動かしただけでこの感触。ラクシャータが僕の戦闘データに合わせて調整してくれたんだろうな。

僕は月下を走らせながら軽く武装などのスペックの確認を始める。

刃がチェーンソー状になっている刀、『廻転刃刀』

スラッシュユハーケンの『飛燕爪牙』

左腕に装備されたハンドガン。

後、攪乱用に使うチャフスモークと武装もかなり充実してる。

さらに注目すべきは紅蓮式式と同じく輻射波動を撃つことができ  
る左腕『甲壱腕型』を装備している事だ。

パワーは紅蓮に劣るけど、十分凄い装備だ。

僕が模擬戦場に来ると玉城の乗った無頼の他に別の無頼が一機。

さらに鹵獲機のサザーランドが一機。

仮想敵としてはもつてこいの三機編成だ。

「いくぜえー！おらおらあー！」

玉城の無頼が無計画に突っ込んできた。他の二機と連携する気なしだねありや。

「もらったあ!!」

玉城の無頼がスタントフアーを大きく振りかぶってきたが、僕は月下の右手で軽く流して玉城の無頼をよろけさせる。

「う、嘘だろおい!」

僕は月下を跳躍させて、後ろに回っている玉城の無頼の背後を蹴り倒し、踏み台にして飛び上がる。

「お、俺を踏み台にしたあツ!」

これ一度やってみたかったんだよね!

僕は飛び上がった状態で一機目の無頼と鹵獲機のサザーランドをハンドガンで撃って撃墜した。

「くそ、この!」

玉城の無頼がマシンガンで反撃してくる。

しかし、僕は月下の機動性を活かしてそれを左右によける。

「いい反応だ。僕の言う通りに動いてくれる!」

僕はスピードを維持しながら瓦礫の壁に向かってスラッシュユハーケンを放ち、そのまま巻き上げて走行スピードを更にあげる。

「そ、そっちか!?! ってはやあ!」

瓦礫の山を超えて飛び上がり、素早く玉城の背後に回り込み廻転刃刀を無頼の首に突きつける。

「動くな……!」

「ひい!?ま、参った!こ、降参だ降参!」

玉城が降参を宣言するとラクシャータから通信が入ってきた。

「ご苦労様。いいデータが取れたわ。まあ本音で言うと、もうちよーっと、粘って欲しかったなあ。玉城くん」

「う、うるせえ!ライ!お前が勝ったのはその機体の性能のおかげだかな!」

解放された玉城の無頼がビシツと僕に指を指してきた。

言わゆる負け惜しみだ。

「そりゃ、そのための性能だしねえ」

「あー。やっぱり予想通りの結末になってる」

僕たちの会話に割り込むようにカレンの声が聞こえてくる。

振り向くと僕の月下の後ろにカレンが乗る紅蓮式式が現れた。

「カレン?」

「玉城たちじゃ相手にならないでしょ? 私もこの紅蓮式式を試運転したいからライ、相手になってよ」

「僕と模擬戦するってこと?」

「ええ。これからはブリタニアだけじゃなくてもっと色んな奴を相手することになるからね。そのためにも強い奴と戦って経験を積まないといけないなの。だから、ライ。手加減せずに全力で私の相手をして!」

紅蓮式式が『輻射波動機構』の右腕を突きつけてきた。

すごい威圧感だ。そして、カレンの本気がヒシヒシと伝わってくる。

「わかった。やるよカレン!」

「だったら私から行く!」

カレンの紅蓮式式が釵の形をした短刀『呂号乙型特斬刀』で斬りかかってくる。

僕はそれを廻転刃刀で受け止め、競り合いになる。

「まだまだ!」

「うおっ!」

紅蓮はこの状態から回し蹴りを放ってくる。僕は驚きながらも月下を仰け反らせて蹴りを避ける。

「これを避ける!?!」

「今度はこっちからだ!」

僕は月下の状態を起こすと至近距離でハンドガンを発砲して距離をとる。

「逃がさない!」

「逃げる気はない! 迎え撃つ!」

紅蓮はハンドガンの攻撃にもろともせず突っ込んでくるがそれを予想した僕は合わせて攻撃を仕掛け、再び釵と刀で斬り合いにな

る。

——場所は変わって黒の騎士団のアジトのモニタ室  
ゼロとラクシャータがライとカレンの模擬戦を観戦していた。

「最高よあの2人。アタシの紅蓮と月下をああも使いこなすなんて。今までにないモルモットになるわよあの子たち」

「君がああ2人をどう思うかは勝手だが、あまり無理をさせないでくれ。カレンとライは我々の最高戦力なのだから」

「それくらいわかってるわよお。おお？今の動きいいわよー。これ以上でないデータが取れるわあ」

「……本当にわかっているんだろうな……」

——再び時間はライとカレンに戻る。

「……エナジーファイラーがそろそろ限界だ……」

「紅蓮も同じ。もうエンプティに入ってる」

「どうやらここは引き分けだね」

「そうね。これ以上は決着つかなさそうだし」

僕とカレンは武器を下ろして月下と紅蓮を格納庫に戻す作業に入る。

格納庫に戻り機体から降りるとラクシャータがやってきた。

「2人ともお疲れ。最高にいいデータが撮れたわよお」

「それは何よりです」

「あーそうだ。あなたの血。少し分けてくれない？」

「いきなりですね。なんでですか？」

「血液検査。パイロットの健康管理とかもあるけれど、ほら、あなた色々調べた方が良さそうでしょ？血液ってさあ結構情報のほうこののよっ。」

「……わかった。後で受けるよ」

「おまかせあれー」

ラクシャータは手に持っているキセルをクルクル回しながら去っていった。そこへ、紅蓮を降りたカレンがやってくる。

「ライ。血液検査受けるんだって？」

「うん。健康診断みたいなものさ。後、自分が何者か手がかりになる  
と思っただね」

「そうか。ライ、記憶喪失だったもんね」

「自分でも忘れそうになるけどね」

僕はあくまで「ライ」を演じている存在だ。それを忘れちゃいけない。  
い。

……結局、本当の自分とは何なんだろうな。

## 6話 黒の騎士団合流

月下と紅蓮の慣らしを終えた僕たち黒の騎士団は準備が整うまでは待機を取っていた。

そしてゼロから召集がかかり、ついに動く時がやってきた。

「我々は今からフジ基地を制圧し、さらに河口湖のホテルをジャックしたWLFと日本解放戦線を名乗るテロリストを叩く。奴らの目的はエリアー1で探掘されるサクラダイトを抑えること。その為にホテルにいるサクラダイト配分会議のメンバーと居合わせた観光客を人質にとっているということだ」

「つまり奴らの制圧と人質の救出が僕らの任務というわけか」

「その通りだライ。まずは私が前に出て奴らの出方を伺う」

「そ、それは危険なんじゃないですか!？」

ゼロの大胆な発案にカレンは意見した。

「奴らはブリタニア相手に奇跡を起こし、キョウトに協力を取り付けた私という存在に強い興味を示している。いきなり殺すような真似はすまない」

「自らを囮にして奴らの真意を見極めるということか」

「そうだ。無論、お前たちには戦闘になった際に出てもらう。では各自、持ち場に付け！」

ゼロの宣言と共に作戦は始まった。

ゼロの予測通り、テロリスト達はゼロを制圧されたフジ基地へすんなり通した。

多分、ゼロ：いや、ルルーシュはいざとなったらギアスを使うつもりだ。

僕たちはゼロの指定された場所でナイトメアに搭乗しながら息を潜める。

「ゼロ、大丈夫かな…」

「心配ないよカレン。あのゼロが秘策もなしに自らを囮になんてすることはなしないよ」

「う、うん…」

「それよりも情報じや国連に加入したって例のフロンティア船団の戦闘部隊とソレスタルビーイングが協力体制をとったそうだしきつとヒイロとデュオも来る」

僕とカレンが話しているついにゼロから通信が入る。

「ナイトメア部隊、及び人質救出部隊は突入せよ！」

「了解！」

ゼロの合図とともに僕の月下、カレンの紅蓮式式、キリコのスコープドックが場に出る。

その間に扇さん率いる人質救出部隊がホテルに突入する。

突然の出来事にテロリスト達は驚く

「な、なんだ奴らは!？」

「人質は解放した！扇、玉城！南と杉山と共に彼等を退避させろ！」

ゼロの命令で扇さん達が人質を誘導し始める。どうやら人質の中にアツシユフオード学園の生徒会の皆もいたようだ。

「ミレイ会長……。生徒会の皆も無事だったのね……」

「ああ。うおつと……。人質の中にはもつと凄い人が混じってたみたいだ?。」

「え?。」

「ごらん、アレを。ブリタニアの皇族のユーフェミア・リ・ブリタニアだ」

「そ、そんなヤツもいたんだ……!」

ユーフェミアはゼロと話し込んでるのが見える。ルルーシュは既に義兄弟のクロヴィスを暗殺している。そのことを問われているのだろう。

ゼロはユーフェミアを逃がした後、テロリスト達に宣言する。

「聞くがいい、WLFのテロリストよ。草壁中佐達は自決した」

「な、何!？」

「彼等は行動の無意味さを悟ったのだろう。さあ、お前達は どうする?。」

ギアスで自決させたのだろう。僕にはわかる……。

そんな事をテロリスト達は知る由もなくゼロに反抗する。



「ふざけるな！我々は……！」

テロリストの反論はどこからともなく現れたナイトメアフレームによって遮られた。

白と金を基調としたカラーリングのナイトメア……ランスロット、スザクか!!

「ブリタニアの白兜か。突入の機会を伺っていたようだ。だが、私のステージの出演者としてお前はカウントしていない。キングを守るルークは既に手配済みなのだよ」

ゼロの言う通り、ソレスタルビーイングのプトレマイオスとフロンティア船団のマクロス・クォーターが現れた。

各艦からモビルスーツ、スーパーロボット、オマケに可変戦闘機バブルキリーまで発進される。

国連の平和維持部隊として派遣されてきたか。

カレンの紅蓮がゼロの無頼を引っ張ってきた。

「ゼロ、あなたの無頼を持ってきたわ」

「よし、ここからは私が直接指揮をとる！」

「あのブリタニアの白いヤツはどうする？」

キリコのドックがランスロットを指差す。

「この状況で我々に仕掛けてくることは無い。無視すればいい」

「了解だ」

僕たちがゼロから指示を受けるとガンダムデスサイズデュオから通信が入る。

「久しぶりだな、カレンにライとキリコも！その2機ナイトメアフレームはどうしたんだよ？」

「このナイトメアの名前は紅蓮式。純正の日本製だよ」

「僕の機体は紅蓮式式の量産タイプ、月下。その先行試作型だ」

（フ……フフ……全ては計算通りだ。これだけの戦力を俺が続べることが出来れば、世界を変えることも出来る）

と言うようにルルーシュは考えてるだろうな。でも、この世界には各作品の主人公たちが集うスーパーロボット大戦の世界だ。黒の騎士団の皆みたいにいエスマンじゃないんだよルルーシュ……。

「各機、攻撃開始！WLFを討ち、世界に我々の正義を示せ!!」  
ゼロの攻撃指示でついに戦いは始まった。

「時間はかけない。直ぐに終わらせてみせる……!」

僕は月下のフットペダルを強く踏み込んで急加速させる。

まずはスモークチャフをばら撒く……!

「な、なんだ!? スモーク弾か!」

「ええい! 視界が煙で遮られる!」

テロリスト達が混乱している隙に僕は奴らが搭乗しているアクシオの背後に回り込む。

「もらう……!」

僕の月下は背後から廻天刃刀を突き刺す。

「ぐああああ!」

「お、おいどうした!」

「て、敵がきて……ぎゃああああ!」

1機、また1機と煙に紛れながら廻天刃刀で次々と切り裂いていく。

「な、なんなんだ! 我々は何と戦っているんだ!」

「ま、まるで亡霊だ! 亡霊がいるみたいだ!」

テロリスト達の混乱した声が機械越しに聞こえてくる。

亡霊か……悪くないね。カレンが赤い悪魔って呼ばれてるなら僕は青い亡霊ってとこかな?

——国連部隊もライの月下の戦いぶりを見ていた。

兜甲児「あの青いヤツ……すげえな。まるで忍者みたいだ」

早乙女アルト「ああ……。煙に紛れて敵を打つ。無駄な動きも一切ない。甲児の言う通り忍者だ」

デュオ「ライのやつ……。あんなに強かったのかよ。機体が変わるだけであーも違うとはよ」

流竜馬「お前やクロウはアイツと一緒に戦ってたんじゃないのかよ?」

クロウ「そんなに付き合いが長いわけじゃないからな」

デュオ「俺たちと一緒に戦ってた時は凡庸機の無頼だったからな。」

あの月下とかいう機体はアイツの実力にベストマッチな機体なんだろうぜ」

ロツクオン「なんにせよ、味方で助かるよ。敵だと思おうとゾツとするくらいの強さだ」

——視点はライに戻る。

僕がテロリストの機体をまた1機墮とすと、スザクのランスロットとすれ違った。

(あの青い機体……強い……！)

(スザク……君とはまた別の形で会うことになるだろうね……)

スザクの横をとおりすぎて突き進むと、僕の行く手をダンクーガノヴァに登場した戦車型ジェノサイドロンという陸上戦艦が行く手を阻む。

「ちっ！面倒な！」

「ライ！私も一緒に戦う！」

僕の横にカレンの紅蓮式式が追いついてきた。

「なら、訓練でやったあのフォーメーション……試してみようか？」

「そうね！こういうでかいヤツ程、効き目ありそう！」

「じゃあ、いくよー！」

僕の月下とカレンの紅蓮は同時に走り出す。

ジェノサイドロンが砲撃をするが僕達はそれをもろともせず避ける。

紅蓮が「輻射波動機構」を、月下が「甲冑腕型」を構える。

2機の腕がジェノサイドロンに突き刺さる。

「輻射波動二段打ちだあ!!」

「吹き飛ばえ!!」

2機の腕から輻射波動が放たれ、ジェノサイドロンに大穴を開けて爆散させる。

「やったねライ！」

「ああ！残りを制圧するぞー！」

マクロスやソレスタルビーイングの協力もあり、予測よりも早い時間でテロリストを制圧することが出来た。

そして、ゼロの宣言が始まる。

「人々よ！我らを恐れ、求めるがいい！我らは黒の騎士団！我々、黒の騎士団は武器を持たない全ての者の味方である。イレヴンだろうと、ブリタニア人であろうと！日本解放戦線は卑劣にもブリタニアの民間人を人質に取り、無惨に殺害した。無意味な行為だ。故に我々が制裁を下した。クロヴィス前総督も同じだ。武器を持たぬイレヴンの虐殺を命じた。このような残虐行為を認めるわけにいかない。故に制裁を加えたのだ。私は戦いを否定しない。しかし、強いものが弱いものを一方的に殺す事は断じて許さない！撃つていいのは、撃たれる覚悟がある奴だけだ！我々は力ある者が力なき者を襲う時、再び現れるだろう。力ある者よ、我を恐れよ！力なき者よ、我を求めよ！世界は、我々黒の騎士団が裁く！！」

ゼロ……ルルーシユの宣言は高らかに世界に配信された。

ここから戦いは本格的なものになるだろう。